11　次の文章は、白居易（白楽天）が漢詩「引」を詠じたときの様子を題材とした物語である。白居易はこの当時江州の司馬に左遷されていた。読んで後の問に答えよ。

　〈熊本大〉二〇一九年度出題

　昔、元和十五年の秋、白楽天罪なくして江州といふ所に流されぬ。次の年の秋、入り江のほとりに、夜、友を送りけり。松風、波の音、身にしむ夕べ、愁への涙いと抑へ難く、小夜も更け行くほど、空澄み渡る月の光、波にしたがへるを見ても、我が身独りは沈まざりけりと思ひ乱れつつ、人もなぎさを物心細くて歩み行くａに、波の上かに、琵琶の調べ様々に聞こえて、き合はせなどの有り様、世に類なきほどなり。これを聞くにあやしき心抑へ難し。、より外に、誰かはまた情けあるべきとおぼえければ、声をしるべにて、「誰の人にか」と尋ね問ふに、「我はこれのなり。昔、ひ十三にて、琵琶を習ひ得たること世に優れたりき。帝の御前にて一度調べしに、の御引き出物を賜ひき。また色かたちｂにめでて、見る人聞く人さながら思ひをかけ、心を尽くせりき。しかれども、春過ぎ秋暮れて、ア見目形ありしにもあらず衰へにしかば、世に経る力失せ果てて、せん方なくなりｃにしより、商人に契りを結びて、この国の民となれり。イ商人情けなければ、我を惜しむこといと浅し。我を懇ろにせｄねば、出でてｅ後、立ち帰る思ひ怠りぬ。帰るほど遅ければ、みづから待たずしもあらず。かかるままには、ただ空しき舟を守りつつ、秋の月のすさまじきをのみ見る」と言へり。

　白楽天、「我、琵琶の声を聞きて、愁へ深し。またこの語らひを聞くに①取り重ねたる心地す。我も君も愁への心同じからずや。必ずその愁への尽きせｆぬことを思ひ知るべし。我んじ年の秋より逃れ、都を離れてこの所に沈めり。また病のに伏して立ち居ることたやすからず。もとも②心細きの波風より他に立ち交じる人もなきに、の上葉を渡る嵐、遠近人の舟呼ばふ音のみ聞こえて、いまだ楽の声を聞かず。今宵の君が琵琶の声を聞くに、ほとほと天の楽を聞くが如し」。

　これを聞く人皆涙を流せり。その中にも白楽天独り③朽ちぬと見えけり。

（『唐物語』による）

問１　二重傍線部と文法的に同じ意味をもつものを、波線部ａ～ｆから一つ選べ。

問２　傍線部ア、イを現代語訳せよ。

◎問３　傍線部①とは、どのような「心地」か。本文に即して具体的に説明せよ。

問４　傍線部②は、『源氏物語』須磨巻で、光源氏が須磨への退去を決意し、思い描いた須磨の様子、「さる心細からん海面の波風より他に立ち交じる人もなからんに」を踏まえる。ここで『源氏物語』を引用した筆者の意図を答えよ。

問５　傍線部③はどのような状況を指すか。具体的に説明せよ

【解答と採点基準】

問１　ｃ

問２　ア＝Ａ容貌がＢ昔とは違ってＣ衰えてしまったので

Ａ＝３／Ｂ＝４

Ｃ＝３〔文末が原因・理由を示す形でなければ不可。〕

　　　イ＝商人は思いやりがないので

「思いやり」は「愛情」などでも可。

　　　［別解］商人は情趣を解さないので

「情趣を解さない」は「無風流」などでも可。

問３　白楽天はＡわびしい左遷生活の中で聞いた琵琶の音色に哀愁の思いを深めたが、Ｂ夫に冷遇され寂しい生活を送る女の不幸な身の上話を聞いて、Ｃいっそう哀愁の思いが深まったという心地。

Ａ＝３〔琵琶の音色に対する愁いの気持ちが書けていれば可。〕

Ｂ＝３〔女の話に対する愁いの気持ちが書けていれば可。〕

Ｃ＝４〔愁いの気持ちが深まった（増した）という内容であれば可。〕

　　　［別解］Ａ女がかつて帝にも認められ、人々にも賞賛されていたのに、今は落ちぶれて荒涼とした月を見ていると聞き、Ｂ白楽天も都から左遷され病を得た自らの境遇とＣ重ね、女に同情したという心地。

Ａ＝３〔女の過去と現在の境遇について書けていれば可。〕

Ｂ＝３〔白楽天の過去と現在の境遇について書けていれば可。〕

Ｃ＝４〔白楽天が女の境遇と自分の境遇を重ねた、という内容があれば可。〕

問４　Ａ光源氏も時流に逆らえず海辺でわびしい退去生活を送ったことを読者に想起させ、Ｂ白楽天の左遷生活のＣわびしさを強調しようとする意図。

Ａ＝３〔同内容可。ただし退去生活における「わびしさ」「愁い」など白楽天の状況に共通する要素が必須。〕

Ｂ＝３〔白楽天の左遷生活に言及していれば可。〕

Ｃ＝４〔「わびしさ」は「愁い」「つらさ」などでも可。〕

問５　女の奏でるＡ琵琶の音色を聞いて人々は皆涙を流したが、この音を聞くほかの誰よりもＢ白楽天は激しく涙を流し、涙で袂がくたくたになったという状況。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝３〔同内容可。〕

Ｂ＝７〔激しく涙を流した、という内容であれば可。〕

【現代語訳】

　昔、元和十五年の秋に、白楽天は罪もなく江州という所に流された。次の年の秋、入り江のほとりで、夜、友を見送った。松風、波の音が、身にしみる夕べ（の情景に）、愁いの涙はたいそう抑えがたく、夜も更けていく時分に、空に澄み渡っている月の光が（海面に映り）、波に応じて揺れているのを見ても、私の身だけが（海に）沈むわけではないのだよ、（月も同じく沈んでいる）と思案にくれながら、人気も無い波打ち際をなんとなく頼りなく不安に思いながら歩いて行くと、遙か遠くから波の上に、琵琶の音色がさまざまに聞こえて、ためし弾きなどの様子は、世に比類がないほど（の美しさ）である。この音を聞いて、（白楽天は）不思議だと思う気持ちを抑えることが難しい。漁師、武士よりほかに（いないはずのこの辺鄙な入り江に）、いったい誰に風流心があるのだろうかと思われたので、音色をたよりにして、「誰であるか」と尋ね問うと、「私はここの商人の妻である。昔、十三歳の時、琵琶（の演奏）を習得し、世の中でも秀でていた（腕前であった）。帝の御前で一度演奏をした時に、（優れた演奏の褒美として）たくさんの引き出物を（帝は私に）お与えになった。さらに、（人々は私の）美しい容貌に対して賞賛し、（私を）見る人も（私の演奏を）聞く人も全てが（私を）恋い慕い、（もの思いで）心をすり減らした。しかし、春は過ぎ秋は終わり、問２ア容貌が昔とは違って衰えてしまったので、世の中で生きていく力を完全に失い、（生きていく）手だてがなくなってしまったので、商人と夫婦の縁を結んで、この国の民となった。問２イ商人は思いやりがないので、私（との別れ）を惜しく思う気持ちはたいそう薄い。私を熱心に（愛することを）しないので、（家から）出て去った後、戻ってくる気持ちを（本来持つべきなのに、夫の義務を）怠けている（ので帰ってこない）。（夫の）帰る時間が遅いので、（私は）自分から必ずしも待たないというわけでもない（＝つい夫の帰りを待ってしまう）。このような状態のまま、ただ空っぽの舟を見つめながら、秋の月で寒々としている月だけを見ている」と言った。

　白楽天は、「私は、琵琶の音色を聞いて、哀愁の気持ちが深くなった。その上この話を聞いていっそう（哀愁の）気持ちが増した。私もあなたも哀愁の気持ちは同じではないか。決してその哀愁が尽きないことを悟らなければならない。私は去る年の秋に官位を失い、都を離れてこの場所で落ちぶれた。さらに病で莚に倒れ伏して立ったり座ったりすることが容易ではない。以前からもの寂しい海辺の波風よりほかには仲間となる人もいない住処で、葦の上のほうの葉を過ぎていく強風や、あちらこちらで人が舟を呼ぶ音ばかり聞こえて、いまだに音楽の音色を聞かない。今夜のあなたの琵琶の音色を聞くと、ほとんど（清浄で幸福に満ちているという）天界の音楽を聞くようだ」（と言った）。

　これを聞く人は皆涙を流した。その中でも白楽天は一人（激しく涙を流して）袂が朽ちたと思われた。